

2015年12月27日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉

聖書：マルコ1：29-31

タイトル：「イエスと弟子と姑」

1. 「イエス」

29 v は前回からの続き。イエスと4人の弟子たちが、カペナウムのユダヤ人会堂で礼拝を捧げた後の出来事である。

29 v 「イエスは、・・・ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家に入られた。」とある。

この時の主語が「イエスは」となっている。つまり「イエスは」とは、イエスご自身が『シモンとアンデレの家に行きます。』と『決めた』ということである。

これは「イエス」というお方が、物事（全て）において主権者であるということを示している。

それゆえ、シモンはイエスをお連れしてではなく、

「イエスは、・・・連れて、シモンとアンデレの家に入られた。」と聖書は記している。

ところで、同じ弟子であるヤコブとヨハネの家は、もっと裕福であったことが、20 v から分かっている。

さらに、マタ 20:20-21 では、「そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとりは左にすわれるようにおことばを下さい。」と、

この言葉からも、ヤコブとヨハネの母が、イエス様について非常に好意的だったということが分かる。

とすれば尚更のこと、イエスが会堂を出て、複数人の弟子たちを連れて行くには、やはりヤコブとヨハネの家の方が、彼らが過ごす場所としては適しているように思える。

しかしイエスはこの時、あえてシモンとアンデレの家に行かなければならなかった理由があった。

30 v 「ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床に着いていたので、人々はさっそく彼女のことをイエスに知らせた。」イエスは熱に苦しむシモンの姑のために、あえてこの家に来たのである。

このようなイエスの行動は他の聖書箇所にも見られる。

ヨハネ4章に、サマリヤの女性の救いが記されている。この時もイエスは、ユダヤ人が絶対に通ることのない（タブーとされていた）サマリヤ人の地域を通って行き、さらには、ユダヤ人の指導者が（これもまたタブーとされていた）女性に声を掛けるということを通して、このサマリヤの女性を見事に救いに導かれた。

また、イエスが非常に親しくしていたラザロという男性が、死んだときも、イエスはラザロのところに急ぐのではなく、あえて2日置いてからラザロのところに外向いたことがヨハネ11章に記されている。

その他にも、十字架にかかるタイミングとして、6日前、3日前、前夜と、イエスはその『時々』を支配し、全てにおいて主権を持って行動していることが分かる。

イエスは、このように全ての物事を導かれる主権者である。

2. 「弟子」

この時、イエスのそばには少なくとも4人の弟子たちがいた。ヤコブ、ヨハネ、シモン、アンデレである。

この弟子たちは、先の会堂でのイエスによる汚れた霊の追い出しや権威ある教えを目の当たりにして、すっかり『自分たちの指導者は凄いもんだ！』と、どこか気分が良かったかもしれない。シモンに至っては自分の姑が熱を出していたことに果たして気付いていたのであろうか。というのは、30vの初めの「ところが」という言葉の自制的な意味は、「(今)この時」という意味を含んだ言葉である。ゆえに、イエスが弟子たちを連れて、シモンの家に行った「(今)この時」に、姑は熱病で臥していた…ので、シモンは、それまでそのことを知らなかった。という可能性もある。もちろんシモンは姑が安息日に礼拝を捧げに会堂に来なかったことを知っていただろうから、何らかの事情があったのではないかと予測することはできたかもしれない。そうであっても、実際には、イエスにより自宅に連れられ帰った時に、姑が熱を出して臥していたことを彼(ら)は知ったのである。共観福音書のルカ 4:38 では「イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスにお願いした。」とある。医者であったルカはこの姑の「熱」の状態を「ひどい熱で苦しんでいた」と記している。マルコとルカの箇所が使われている「熱」という単語はそれぞれ違う単語であるが、どちらも意味としては「重度の高い熱」という意味である。更に姑の年齢としては、シモンという人物が、ある程度高齢であったことが聖書(の他の箇所)から分かっている。その姑となれば、非常に高齢であったことが分かる。また姑がいたということは、シモンには妻がいたことになる。そしてこの家には、シモンの弟であるアンデレも一緒に生活していた。聖書の中でアンデレに家族がいたことは記されていない。おそらく彼は、漁師として、兄シモンとの仕事仲間といったところだっただろうが、幾ら仲のいい兄弟だったとしても、兄家族、その嫁と姑と一緒に暮らすというのは、人には言えないけれども、家庭の中でも様々な問題を抱えていたかもしれません。彼らにしてみれば、イエスを招いて休むにしても寛ぐにしても、自分たちの家ではなく、広くて裕福な家であったであろうヤコブとヨハネの家の方がはるかに良いのではないかとも思えたのではないだろうか。これは人間的に考えれば現実的なことである。しかし、もしこの時ヤコブとヨハネの家に彼らが、行っていたとなれば、シモンの姑は取り返しのつかない、非常に危険な状態になっていただろう。人間的に考えれば、ヤコブとヨハネの家の方が、イエスを招くのにははるかに優れて好条件であったわけだが、残念ながら、人間は、物事全てを適切に把握し、先を読むことが出来ない。その思いや計画というのは一面的であったりして、時にお粗末で、また頼りにならないことも多い。良いと思ったことが、かえって悪くなったり、反対に駄目だと思ったものが、すごくよくなっていることを見て悔しがったりもする。そのように人間は、物事を正しく適切に把握することが非常に困難である。伝道者の書 3:11 にはこのように記されている。「神のなさることは、すべて時になくなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」人間は物事を初めから終わりまで見きわめることが出来ないのである。弟子たちは、イエスのようにすべてを把握し見通して、姑を癒すために「シモンの家に行きましょう！」と声を発することが出来なかったのである。人間が自分の考えと計画の中で事を進めていく時に、姑が熱病で苦しんでいたことを知らなかったよう

に、そういった最も大切にすべきことがなおざりにされていくことがある。それがこの時の「弟子」の姿であり、また同時に「私達人間の姿」と言える。

だからこそ、先を知り、導くことが出来るイエスにつき従っていく「本当の「弟子」」となることが必要なのである。

3. 「姑」。

彼女の熱病は、非常に重度な熱病であった。

それが、どれほど重度な熱病であったかというのは、イエスの癒しの御業からさらに見ることが出来る。

31vの中に「手を取って「起こされた」という言葉がある。この「起こされた」という単語は、ギリシャ語で「よみがえる」という意味がある。

使徒の働き3：15b「・・・神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」の「よみがえらせました」という言葉が、この「起こされた」という言葉と同じ言葉である。

このほかにもラザロのよみがえりのところでも、同じように「よみがえり」という意味で使われている。

つまり、この姑は、死の危険があるほどの重度な熱病であったところから、イエスによって癒され、「(起こされた) よみがえらせられた。」ということである。それほど苦しみから癒されたとなれば、姑にとってどれほど嬉しかったことだろうか。また身体も実に楽になったことであろう。

一般的に病み上がりからの回復には2~3日が必要である。しかし、イエスによって癒された姑は彼らをもてなすことが出来たのである。この「もてなす」という言葉は、「仕える」という意味がある。さらにこれは「この時から仕え続ける」という意味である。

つまり、この姑はこれ以後、イエスに仕え続けた。ということである。

実際、これ以後、このシモンの家は、カペナウムでのイエスの宣教の拠点となったのである。

イエスの御業と御言葉に触れ、癒され、そして慰めと励ましを受けた者は、受ける側から仕える側へと変えられる。それは、死んでいた自分、また、どうにもならない自分がイエスによって よみがえらせられた という確信と感謝があるからである。

そうして私達は、このイエスについて行きたい、従って行きたい、仕えて行きたい。と日々信仰が増し加えられていくのである。

この姑はまさに、そのような体験をしたのである。

その結果、このシモンの家を通して、カペナウムでのイエスの宣教は

大きく前進して行き、さらにはシモンの妻も救いに導かれ、世界宣教に大きく貢献しているのである。

1コリント9：5には次のように記されている。

「私達には、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパ（シモン）などと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか。」

イエスによる姑の癒しというのは、単に、彼女を癒しシモンとその家族を安心させるための一時的な御業であったというのではなく、後にシモンがペテロと呼ばれ、クリスチャンとなった妻の協力のもと、使徒たちのリーダーとなり、福音が全世界に届けられるという、世界宣教のはじまりでもあったという、神の驚くべきご計画が背後にはあったのである。

MJCC が今年もここまで主によって導かれたことを心から感謝します。迎える主の年2016年も、主の遠大なご計画がなされて行きますようにと心から期待したい。